せたかむい
発行・古平町史編纂室
文化会館☎42-2590
第178号・16・7・1

年表で読む 古平の歴史

《84》

古平のコンブ漁 2

■漁業税と製品の検査

コンブの採取と漁業税は、明治六年から次のように決められていた。

明治六年～同一四年までは税率が一定で、舟一隻につき一八貫（六七・五キロ）であったが、同一五年には二〇貫（七五キロ）、その後は採取する者一人につき四貫（一五キロ）結四把（六〇キロ）と定められ、すべて物納であった。（明治二〇年以後の記録なし）

明治二五年にコンブ製造の取締規則が制定されたが、当時は樺太や本州でとれたコンブを道産コンブの中に混ぜて、清国（現在の中国）に輸出する悪徳業者もいたことから、さらに規則を設けて、証票を付けなければ区外への搬出もできなくした。

その基準は○結束、○乾燥、○選別、○尺度（長さ）、○重量について検査した。

古平コンブの基準は、長さ九〇センチ、重量一五キロで、長いコンブでこれを結束した。

明治四三年、古平コンブを小樽港へ移出したが、その年の生産額は一九二円であった。

■コンブからヨードを製造

その後、大正三年、第一次世界大戦が起こると日本への薬品類の輸入が止まってしまった。

消毒薬の原料となるヨード（以前は家庭用の消毒薬として重宝された）が不足したため、コンブなどの海藻類を焼いて、その灰からヨードを製造するようになった。

江差から来た増田章三がヨードを製造する工場を建てたが、入船町の本間権平商店が、周辺の町村から海藻類を焼いた灰を一手に集めて供給していた。

■コンブ製品

古平産のコンブは、折昆布、長切昆布、棒昆布の三種類が製造されていて、折昆布（ホソメコンブ）の格付け基準は次のようになっていた。

1. 乾燥は充分であること
2. 一把の正味重量は五〇〇匁（一・八八キロ）と二〇〇匁（〇・七五キロ）とする
3. 折昆布の長さは一尺五寸（約三二センチ）または一尺一寸（三〇センチ）とする
4. 結束は昆布縄またはひもで三か所を結束する
5. 伸展（可晒ばすこと）は充分にし、赤くなったものや砂の付いたものが混じらないこと

根元の切り方や結束した幅なども規定し、等級は一等から四等までとした。

昆布製品の等級は中央を縛った縄の色で、一等は青、二等は赤、三等は紫、四等は着色しない縄を使用して区別した。

■ホソメコンブ

北海道は昔からコンブの名産地として、鰊や鮭と並んで特産物であった。日本近海のコンブは六種類ほどあるが、古平のコンブはホソメコンブといわれる種類で、だしや一般の煮物には適さないが、値段が安いことからつくだ煮の原料として重宝されていた。

■諸外国での用途

中国では、ヨードが甲状腺予防に効果があることから総菜として用い、日本から多量に輸入していた。また、ヨーロッパ諸国では家畜の飼料に混ぜ、牛乳や鶏卵のヨードを高めて栄養価を増すことに利用したりする外、コンブからアルギン酸という成分を取り出し、アイスクリームやゼリーなど菓子の原料にする方が多いという。

コンブも国によってさまざまな利用の仕方があるものです。

高野名幸作さんの日記から
当時の世相を見る
【79】

大正一二年

▼三月一日
　店は建網の支度でボツボツ忙しい。昨年、一昨年あたりよりひまだ。リンゴは売り切れたので関口さんから四銭で一〇〇斤だけ買って来る。毎日、四、五円が売れる。刺網六〇掛け三〇〇間と四五掛け五〇〇間出た。父は相坂さんの仏事があり行く。夜になっても雪は休みなく降る。美国㊋へ網四〇反を馬車で届ける。

▼三月二日
　起床八時半、天気快晴になった。店は一〇時頃から忙しくなった。西河から網九反、麻五貫、外綿糸、アバ縄など一六〇円余りが現金で売れた。人夫六人で来て背負って帰って行った。大黒屋から綿糸の注文がある。店も一時に一〇余人もの客で、目の廻るような忙しさだった。午後二時頃から少しひまになった。この日、刺網九〇〇間出た。

▼三月三日
　起床八時、天気快晴だ。漁夫は今日も汽船で大勢が上陸した。行李やら土産の飴バチなど馬車に満載して通る。学校では唱歌会があるというので、子供達は勉強道具を持たずに行く。一枝さんが正午の船で小樽から来る。久し振りのことで、子供達もお土産を貰って大喜びだ。店は建網、刺網の客で大忙しだ。リンゴも四円程売れた。夜、父は困老婆十三回忌の仏事に招待されて行く。

▼三月四日
　起床七時、今日は寒さが厳しく激しい吹雪だ。また冬が戻ってきたようだ。困老婆の十三回忌の命日なので、父と妻がお参りに行く。店は建網支度でかなり忙しい。リンゴも四円程売れた。夜になっても雪と風が強く寒中の如し。聞けば、新地㋓の姉さんが不快中のところ、東京で病死されたとのこと。まだ若く子供もいるというのに気の毒だ。思い起こせば、自分等小学校時代の同級生だ。昨年、校門の寄付のときも㋓へ行き、姉さんから寄付をしてもらいしばらく話をしてきたのに、実に世の中は一寸先はわからぬ。

▼三月五日
　この朝はずいぶん寒い。また寒中が来たようだ。店は建網の客でかれこれと忙しい。一枝さの縁談の件。㊥から人が来ての話で、先方では適当な人を見つけて取り決めたとのこと残念ながら破談になったとのこと。実に一言の挨拶もなく、他に決めるなど全くひどい話だ。しかし、今さら仕方がない。この後、他に良縁を求めねばならぬ。夜、小樽田の奥さんにも電話で通知した。㋚で部落会の例会がある行く。一〇時帰る。

▼三月六日
　起床八時、朝の内は晴れていたが昼前から吹雪になった。今日も寒中の如し。積丹の日司から刺網六〇〇反を取りに来る。外にも刺網の支度で忙しい。一枝さんの縁談の件、当方に断りもなしに、一方的に他に話を決めるとは実に不届き至極だ。せっかく先日からの骨折りも無駄になってしまった。気分がおさまらない。夜に入っても吹雪はなかなか止まぬ。リンゴも三円五〇銭売れた。

▼三月七日
　ようやく晴天になり春らしくなった。海は上ナギ。一枝さん、この日一〇時の船で小樽へ帰る。妻は浜まで見送りする。浜町の通りは雪引きをやっているので、道路の高いところ低いところがあって、馬そりは駄目だ。このナギでカレ網なども出た。店は忙しい。刺網九〇〇間も出た。

▼三月八日
　今日もずいぶん暖気だ。熊さんと鎌田さんが来て店の前の雪引きをやる。店は建網支度で忙しい。父は㋓山崎さんの遺骨が着いたというので通夜に行く。夜になり雨が降り出した。

▼三月九日
　起床八時半、この頃は朝夕が余程日が長くなった。鰊場も近づき、どこも鰊場気分で気もい

そいそしている。便船が入る度に、竹行李や夜具などを背負ったヤン衆連が上がって来る。本日まで二千五百人くらいは来ているだろう。聞けば昨日、ガンズ網に鰊がかかったとのことだ。店は建網連の支度で忙しい。この日はダシ風が強く暖気、雨が降り雪も消える。夜、父は「セ」姉さんの通夜に行く。リンゴは毎日売れ、今日は五円余りも出る。

▼三月一〇日

朝のうちは晴天であったが、一一時頃から吹雪になった。「セ」姉さんの葬式当日は父が見送りに行く。同級生として実に哀悼の情に堪えない。店は時期が切迫して来たので、貸し方ばかりが多くなる。現金は一〇円内外とは情けない。どうも鰊場の常として、この時期になれば借りること、貸すことになってしまうのは悪い習慣だ。内地での仕入先は、この頃は一年ごとに現金制度に変わっている。古平近辺の漁場では、何十年前の取り引きの習慣がそのままだ。これは追々改善せねばならぬ。今日は一日中強い風が吹く。

▼三月一一日

起床八時、ようやく天気快晴となる。越中屋の重久さん、今日札幌中学の受験で父親と共に行ったとのこと。合格してくれればいい。来年は家の幸治の番になるのだ。熊さんは鎌田さんとリンゴ樹の雪除けをやる。大雪で枝が傷むのでその予防だ。今日は一天雲なき青空で、町中の雪も大分消える。漁場では雪投げやら網船の手入れなどで忙しい。浜もだんだんと活気づく。四、五日中には網下ろしのところもあろう。佐渡から伊藤さんの兄さんが初めて来られる。茶の間でしばらく話をする。リンゴの売れ行きが予想外で、今日も六円余り売る。夜は静かで、星は満天に銀砂でもまいたようにきれいだ。子供等は学校が休みなので畑へ遊びに行く。

▼三月一二日

八時に起きた。町は漁期が近づき活気づく。晴天で春景色だ。戸外に出れば一天雲なき青空で、鰊でも来そうな天気模様だ。日中は暑い程で、長い冬ごもりも終わりそうだ。蝿の飛んでいるのが見えた。本年では今日網下ろしをしたそうだ。大漁旗を立て景気良い。二、三日中には大抵網下ろしをするだろう。店では建網関係から綿糸、岩糸、刺網ではアバ縄などが多く出る。刺網の準備もいよいよ終わりになったようだ。夜に入っても暖かく、静かな天気だ。この分だと明日も晴天ならん。熊さんは関口さんへ行き四九号を二百斤買って来る。午後、農園へ雪除けに行く。

▼三月一三日

昨日の晴天はどうしたのだろうか、朝九時頃から大吹雪になった。戸外は一寸先も見えぬ程だ。鰊場が来るというのに吹雪に寒波で、また冬に戻ったようだ。店は閑散になった。熊さんは新地の銀行へ用足しに行く。店では刺網のいかり網用の中アバ縄がボツボツ出る。リンゴも三円程売れる。この日、小樽税務署員が来る。営業税の届け出二万円の申告をしておいたところ、昨年通り三万円に訂正してくれとのこと。それでいろいろ話をし、二万五千円ぐらいでどうかと言ったが、とうとう昨年と同じ三万円に決定した。今年は昨年とは違い少し落ちるが、こうなっては仕方ないだろう。夜は大吹雪になる。

▼三月一四日

昨年来の大吹雪だ。この時期に何でと思うが、近年稀なことだ。朝、熊さんが雪かきに出たら、吹きだまりが一尺以上もあり二時間もかかった。彼岸が来るというのに北海道はまだこんなだ。小樽新聞によれば一二日、美国沖で探海丸が鰊七二尾を獲ったが、八年生で卵も熟しているとのこと。水温も高いので、追々鰊の群来があろうとのこと。大正九年の水温に似ているという。それなら今年は大漁ならん。この日、佐渡の伊藤さんが遊びに来て父といろいろ話をし、夜食のそばを食べて九時頃に帰っていった。

▼三月一五日

チラチラと雪が降り、天気も思わしからず。こんな様子では鰊はまだまだらしい。しかし、天気快晴になれば気がもめる。この頃は日増しに畑方面から、鰊戦争に備えて浜方へ引っ越す人が目立つようになった。今日もソリに夜具、布団、家財道具を積んで運搬し、戦闘準備に取りか

山中の樹林に眠る 庚申碑

古平町内に庚申碑(塚)が七基あることは知られていますが、沖町の庚申碑だけは写真が無く、記録の上だけで所在や由来が伝えられてきました。

五月末、所在を確かめ、写真を撮りたいと思って出かけました。おおよその場所だけは見当がついているつもりでしたが、道ばたで仕事をしていた人に確かめて道を登りました。

上水道の建物の周辺だと、その辺りの茂みの中を探しましたが見つかりません。

仕方なく下の道路まで下りてさらに尋ねたところ、ちょうど通りかかった人から、「そこなら私が案内して上げるヨ」と思いがけないご好意にすがり、その時はどなたか分からなかったのですが、片山澄子さん(旧姓・田口)でした。片山さんは仕事の途中で鎌を持っていましたが、傍に居た岡崎さんのおばぁさん？　が、「鎌を持って行った方がいいですょ」と、わざわざ家から鎌を持ってきて貸してくれました。

「タケノコ取りに歩くので、庚申さんなら知っているヨ」という、心強い片山さんに案内してもらい再び歩き出しましたが、何と前に探していたところとは大違いのようで、生長のいいイタドリやフキに交じって、ササも生えている疎林の中を進むこと一〇数分、足元には僅かに水も流れていて植物の生長のいいのもわかります。

鎌で刈ったりササを掻き分けて歩き、もう丘の上かと思われる辺りに、やっと探しあぐねていた庚申碑が見つかりました。

～歓談のあと～　右から坂井さん・岡崎さん・片山さん・荒沢さん・岸さん

うっそうとまではいきませんが、周囲の鮮やかな緑を反映して庚申碑も緑色に染まって見えました。念願の写真を写し、やれやれと思うとたまっていた汗がどっと流れてきました。

「片山さん、どうもご苦労様でした。ありがとうございます」

この庚申碑は、元は余市山道の登り口にあったそうですが、これを建てた沖町の宮沢さんが後にこの場所に移設したものです。宮沢さん一家はすでに転居して、この庚申碑のことを知る人も今では少なくなってしまいました。

庚申碑の写真は茂みの中で見た通り、やはり青みがかっていて正しく時代を感じさせます。

昔、沖村と沢江村を結ぶ道はこの辺りではないかと思われ、途中に橋がかかっていたことは記録にもあります。

帰りがけ、居合わせた沖町の人達と歓談できました。いろいろとありがとうございました。

かっている。古平は鰊場が町の経済の八割以上をもっているのだ。もし江差など、道南地方のようになったら、それこそお化けでも出るだろう。だがどうしても鰊場気分が抜けず、一般に貯蓄心の無いのが欠点である。熊さんと板倉、アバ縄、ワラジなどの後片付けをやる。ざっと調べて見たところでは、中アバ縄一〇〇丸、××(三本明)一三〇丸程、えびす六貫目二〇〇余丸、改良縄六〇丸、並アバ縄一二〇～一三〇丸、大アバ縄一〇〇丸、合計七〇〇丸以上。代金にして二千円ぐらいはある。本年は並アバ縄と中アバ縄で合計五、六千丸は買わねばならぬ。（続く）

おしゃれと健康

大澤文子

"細くなったり太くなったり困っちゃうわー"

なんてチョッピリ文句をいいながら、私に合った仕裁てをたくみにしてくれる従妹の洋裁師は・・・。健康と若さを保つには「食事・運動」それにストレスをためない等々。

それは誰でも知っている条件であろうが、忘れ勝ちなのは"それなりのおしゃれ"とその関心だと思う。

おしゃれとは言えないが何年か前まで、私のトレードマークの様になっていた洋服は、一切統一したデザインだった。

衿ぐりにはわざわざ三センチ巾の切り替えを入れ、その部分に芯を入れる。

袖付けの半ばから裾までに切り替えを入れ、スカート分にフレヤーを少々入れる。

ウエストのところで二・五センチ巾のベルトを前にだけつけ、バックルにポイントを置く。

袖つけはタイトスリップで清潔感をだす。

外出着、普段着、式服等一切統一したデザインだった。

「あきないの？　別な型にしてみたらどう？」

親切な一歌友が気をつかって注意してくれる。

「ありがとうネ、でも私にはこれが一番いいの」

衿をつけて前開きにでもして、ベルトをしめてごらんなさい。

想像しただけでもデパートの大きな鏡が"おやめなさい"とささやくでしょう。

いつか四十キロぐらいに体重が減り、かもしかの様な美しい足になったらその時考えようーと、言葉のお返しをしたことがあった。

たまには行きつけの洋装店に気の向くまま立ち寄り、自分の体型に合った服地を物色する。

それが唯一のおしゃれかも知れない。型を考える必要もなく、ただ色柄、生地を選べは用が足りる。いつもチョッピリ文句をいいながら仕裁ててくれる従妹に感謝！

服装は精神衛生を左右するとも言われる。下着一枚替えても、爽やかな若やいだ気分になれる。

『おしゃれは希望の種を蒔く』という言葉を、何かの本で読んだことがある。

「成る程なァ・・・」と、思ったこともあった。

また、現在の家庭や個人の間でも、"心の通じあい"という大切な時代ではないか・・・と、も思う。

服装でさえ親子ペア、恋人ペアなどが好まれるのは、たとえ話し合いがじゅうぶんでないにしても、同じものを着ていれば心が通じあう・・・ということではなかろうか。

一世を風靡したミニスカートがほとんど街から姿を消し、膝の見えかくれする程度の落ち着いたスカートの人々が一時多くなったひと昔、

下着の見えそうなミニスカートの女の子を見て度胆を抜かれたものだが、それも慣れてくると可愛ゆく、モダンに見えてくるから不思議なもの。

さて私はある日、洋ダンスのおく深くしまいこんでいた古洋服をひっぱり出してみた。

ワサビ色、こげ茶色、ベージュ色のワンピース、どれも丈は短く、それに身巾のほっそりしたものばかり、息をつめて身を細くしても、到底わが身をつつめるものではない。思わずフーッと座りこんでしまう。

商魂たくましく、メーカーが作りだす流行などに左右されてたまるものか・・・と我を張ってみても、所詮、スカート丈を短くしてみたり・またほどいて長くしてみたり。

なんとなく、流行の波に乗りおくれぬように心をくだく弱い女ごころ、

女ごころとは・・・なんといじらしいもの。　嗚呼（あー）

早春の積丹を行く 1

―札幌通信 第19信―

吉川義雄

書棚を整理していると、思いがけない古い原稿が出て来た。役場在職時代だから、多分、昭和二十三年か、遅くとも大火直前のものと思われ、一応、忠実に再生することにした。

☆　☆

樹木の枝には、芽の膨らみが分かるけれども、流れの岸の、柳の外に青さは見えない、

こんな早春に、更科源蔵先生ご一行がやってこられた。

札幌市交通局が、新しい観光コースを、積丹半島に設定したいらしく、その検分や、ガイド資料を求めての来町であった。

一行は、更科先生と、北大在学中のお嬢さん、交通局観光担当の蛯子技師の三人。その車に、伊藤町長の厳命で、私が案内役として同乗させられた。

「積丹半島の旅は、全くバラエティーに富んでいる。私だけの観方で言うと、伊豆半島を旅しているような気持ちにもなるし、積丹岳を車窓から眺めて走るのは、浅間の麓を走っているような気分にもなる。峠を登りつめて海が見え、原野を走り抜けて、奇岩のそそり立つ海岸を伝わって行く。こうしたすばらしいところは一寸珍しい」

以前に一度、来られた経験のある更級先生が、古平の旅館で、激賞されていた。

古平から、美国に出る道路を、ほんの少し車が進むか進まない内に、お嬢さんの歓声が車内に響いた。

「道路も、全く良い」

ハンドルを握る、蛯子技師も上機嫌。

群来村。ここは古平の風景の内でも、鄙びたのどかさがあって、私の大好きな所だ。

丸山の裏側「トマリアサム」続いて「ヘロキカルウス」往年の、鰊の千石場所に、ホッケ釣りの小舟が、幾そうも眼下に見える。

厚苫岬から、美国領に入る。白い道が、峠を大きくカーブして消えるその先に、美国の家並みが、陽に映えて見え、観音岬から、宝島がちぎれて海に浮かび、その背景には、互いに背伸びをしない稜線が連なり、煙霧の中に、幾つかの断崖を海に伸ばして続いている。その先が「マッカの岬」で、終止符を打ったみたいに、岩が一つ張り出して立っている。

美国から郵便局長さんで、土地の観光協会長でもある川崎さんが、一行に加わる。

美国から山に入る。左の車窓に、積丹岳の雪の白さが、陽光に輝いて見え隠れする。白樺の林の中に、幾羽もヒワが飛び交っているのが詩情を誘う。

「婦美開拓地」高原の原野の中を、清冽な流れが光り、直線の道を、私達の車は快適なスピードで走る。道と平行している牧場で、仔馬が首を伸ばして、母馬のオッパイにありついている。

「団子茶屋」とか、「ヲタルル茶屋」とか、面白い地名が、この辺につけられているが、その昔、旅人が足を休めた茶屋のあったとろから、この地名となったらしい。

積丹岳の麓に広がる、広大な高原、灌木と熊笹の密生しているこの辺りは、熊か鹿しか居なかったろう。その中を細々と続く小径。そこを今、車で走っているのだ。

戦後。開拓が急速に進められ、遥かに、見渡す限りの平原となっている。

「ヲタルル茶屋」から入舸への道を左に折れる。小高い坊主山に狭められた道を、幾度も渓流に沿って曲り下って、「幌武意」の小さな部落に入る。幼児も大人達も車を眩しそうに見送る。

入舸村は、侘しいところだ。三方を山に囲まれ、海を望む一方は、強い東風に、泡立つ波に押しまくられ、健気に我慢しているような村落に見える。夏には、観光客も訪れるというが、格別の用事が無ければ、来る人も無さそうだ。

（続く）

戦中中蹣

泣き笑いの樺太漁場体験記

戦後蹣跚

吉野慶一郎

同志を迎えて　思いがけない新たな出発　強力な助っ人の加入で、一同も大いに勇気づけられました。

もしかしたら、先月の私達の素人演芸会を見て余りの貧弱さにもどかしくなり、それならここで我々も協力して、と仲間入りを望んで来られた、私達にとってはまさに"時の氏神"願ってもない幸いと、喜んで皆さんを迎え入れました。

祖国へ帰る夢を失った人々の心を慰めるのはやはり音楽なのでしょうか。今は私達と同じ境遇に置かれた人達は、とても他人とは思えない。

集まった人達とはそれぞれ皆初対面でしたが、この人達と今は同じ運命を担った同胞という意識で、すぐに長年の知己のようにすっかり打ち解けて話をすることができました。今すぐ帰国という夢は消えても、せめて音楽によって傷心を癒やそうというのが、集まった人達の共通の思いだったようです。

今度の公演については、この人達の豊富な経験を生かしてもらうべく、いろいろな面での指導もお願いしたところ、

「そのような心遣いに感謝しております。及ばずながら一緒に頑張りましょう」

と快く引き受けてくれました。

こうして白樺楽団は新しい陣容で、前途に大きな希望も開け再出発となりました。

指導者を得て　実際に公演に再演にも自信

向けての練習や準備に取りかかりましたが、仲間というより、指導者としての実績と技量はさすがでした。数少ない荷物の中に楽譜や資料を大切に保管していて、これらを参考にして私達の音楽練習が始まりました。

「まさか、こんなことで役に立つとは思わなかった」と、先生は苦笑しておりました。

「この楽団員は、ソ連音楽芸術家達と聞いています。それならばそれなりにやりましょう」

と先生は張り切って、外国（主にロシア）の歌や曲をプログラムに取り入れました。

逆に私達の方は、「うまく出来るのか？　これは大変なことになった」とばかり、緊張するやら心配になってきました。

しかし、先生の方は素人に対する指導は心得たもので、一人一人手とり足とりの懇切丁寧な指導ぶり。その熱心さに励まされて、練習も次第に熱を帯びてきました。

練習が進むにつれ団員一同も練習が面白くなったようで、最初の心配もだんだん自信に変わっていったようでした。

今回はソ連軍の発行した『夜間通行証』のおかげで、練習にも十分な時間をとることができました。

また、ソ連軍からは、例のアメリカ製の食料品やコーヒーなどの差し入れもあって疲れも忘れ、楽しく練習が出来たことも幸いでした。

引っ張り出した　戦前、当時アコーデオン

の満州国で就職した弟が残して行ったアコーデオンがありました。その頃はアコーデオンがひとつの流行で、私もその魅力に夢中になって独習した時期がありました。

しかし、その後の支那事変が拡大し、応召兵が次々に出征するような時代になり、『兵隊さんは命がけ、私達はたすきがけ』とか『ぜいたくは止めましょう』などのスローガンが街中に目立ち、世の中は次第に緊張感がただよって来ました。

もう若い者が音楽を楽しんでいるような時代ではないと、思い切って押入れの中にしまい込んでしまいました。

前の演芸会の時には、発起人の一人でもあり、思い出して久し振りに仲間とバンドを組んだのです。

～続く～

連作『世平夢去』

坂本甚衛

（七）

夢去りぬ（1）

この体験談は八年前「余市文芸」に『瑪瑙（めのう）』と題して発表した拙い小説であるが、まんざら古平に縁のない素材でもないので、出来るだけ不要部分は省き簡単に綴ってみることにした。

× × ×

ことの初めは休日で勤務先から帰り、晩酌をやっていた私の耳に届いた、妻と娘の電話でのやり取りだった。古平に嫁いだ娘はその町のトリムクラブと称する登山同好会に所属していて、その晩も、秋分の日に続く連休に、大滝村三階の滝から支笏湖畔を経て樽前山に登る予定だと、妻との長話だった。

聞くともなく聞いていた私の写欲が、むくむくと頭をもたげた。人並みに写歴は古い方だが撮影の腕は一向に上達しない私がである。若い頃から地質調査の旅で全道の町や村、隈なく歩いたつもりでいたが、支笏湖周辺だけは何故か未だに足を向けた覚えのない、いわばエアポケットの地域だつた。

「おい、俺も行きたいな。綾に電話して連れて行ってくれないか、頼んでみろよ」

思いあぐねた末、それでも幾らか遠慮勝ちに私は妻に言った。

「そんなこと言ったって、綾子の一存で決まるもんでもないっしょ」

「だから頼んでるんだ。アイツだってその登山クラブは古い方なんだろ、そしたら融通利かして会長か、誰かお願いするなり、頼んでくれてもいいだろうが……」

私にしても、虫のいい話に違いないのは充分承知していた。会費を払っているわけでもない、なのに突然、いかに会員の親とはいえ他町村の人間が図々しく同行をせがむのは非常識というものだ。にも関わらず、参加したい念は私の中でぶすぶす燻り続けた。

翌朝、直ぐ返事がきた。現在のところ申し込みに二、三人空きがあるから、行くなら当日の朝六時半までに、余市駅前で待つこと、さらに妻に告げた。丁度よい折だから母さんも一緒に行かないかと。思うに固苦しい父親一人よりか、何事につけ話し易い妻なら気も合い、それに是非一度登山の醍醐味を味わわせてやりたい娘の願望と、私は推測した。

その頃、娘は浜町の郵便局にバイトで出入りしていた。聞けば登山倶楽部の会長は上司のTさんで、娘も頼み易かったとみえるし、また快く特別に許可してくれたらしい。妻も即座とはいかず、暫くためらった後、私のおだてもあって結局山行きを承諾した。私は登山靴に保革油を塗り、登山靴を所持していない妻は、靴底が厚めのビブラムタイプのスニーカーを求め、登山への不安感も幾らか解消したようだった。

平成元年九月二十四日、初秋の陽光に風が光る朝、私ら夫妻は余市駅前で古平からのバスに便乗した。大型バス二台は小樽に出、朝里峠を越え、喜茂別町で276号線を左折し大滝村に入った。

やがて渓谷に、さして広くない駐車場を備えた三階の滝が現れた。会長のTさんが立ち休憩を言い渡した。素晴らしい風景だった。名の通り三段の階段状にに飛沫を上げる滝は水量も豊富で、クリスタルガラスを砕き粉末にして流したかに日光にきらめいていた。私は遊歩道を川上へ、下流へ、限られた時間を有効に活用すべく猿のように歩き回写した。

二十分後、総勢八十余名を乗せたバスは再び276号線を走った。左手に支笏湖が広がっ

高野素十句碑

ふるさとを向うしたる秋天下

請い、自費で句碑を建立した。

この句は素十の代表作とも言われるのか、また素十のお気に入りのようで、素十の没後、故郷である茨城県山王村（現在藤代町）にも、昭和五九年に同じ句碑が建てられている。

昭和二七年八月、折から北海道を吟行中の高野素十を古平ホトトギス会が招請し、古平から積丹方面を周遊しながら指導を受けた。

その年、古平小学校開校七十七周年を迎えることから、卒業生でもある水見八郎（句丈）さんが、母校への記念にと一句を

「先生はホトトギスを代表する実力者であり、法医学で有名な大学教授というので初めはみんな緊張したが、温厚で気さくな方で、気がねなく楽しい話ができた」とは、生前の句丈さんが話していた言葉である。

⇦当時の沢江村から歌棄村へ抜けるトンネル前で、高野素十を迎えての記念撮影（前列向かって右から二人目が高野素十・その右が会長水見悠々子・左端が句丈）

た。夏の名残りを惜しむカルデラ湖に若者たちがカラフルに群れていた。間もなくバスは湖畔の駐車場に停車した。かなりの車で埋まっていた。「苔の洞門」の入口である。

私はリュックを網棚に、カメラだけ持ち涸れた沢を足早に上流へ向け急いだ。苔の洞門と記した掲示板が立っていた。人の列に続き足を踏み入れ、自然が創り出した奇観に息をのんだ。

両側は高さ数メートルに及ぶ岩の裂け目の中、、人間二人がやっと通れる幅の小路が延々二キロ状にわたって続く。左右に直立する岩壁の表面を、びっしり緑の苔が覆い尽くしている。

（続く）

先月号の「発行月が間違っていませんか？」というご指摘が多く、愛読される方にもより分かりやすくするため、今月号からNoではなく、月で表示することにしました。

続いて、『高野名幸作日記』も、タイトルのデザインを少々変えてみましたがいかがでしょう？

また、来月から『北海道の市町村の移り変り』を取り上げ、一六ページにするつもりです。

老兵の綴り方

あゝ樺太国境守備隊

19　橘　義春

□武意加で軍道建設　～続く

幸いラッパ手だったからであろうか。坂東准尉が私を工兵隊の測量係助手に回してくれた。ありがたい。こんな楽な仕事はない。毎日、弁当と測量のポールを持って、工兵隊の下士官と髭の兵長の三人で、これから施工する軍道と陣地構築の場所を測量するのが仕事だ。

午後二時頃にはその日のノルマが終わり、後は自由時間のようなもので、マムシを探しては捕まえたり、髭の兵長は漁師の出身なのでいつも釣り道具を持ち歩いていて、柳の枝を切って竿を作り、ヤマメやウグイを釣り上げると頭を取り、皮を剥いでそのまま生でかぶりつき、うまそうに食べるのには驚いた。私にもうまいから食べなさいと言われたが、これは丁重にお断りした。

しばらく測量の仕事が続いたがそれも終わり、やがて中隊の土木作業に戻ったが、間もなく、またまた坂東准尉から私と松木ラッパ手の二人に、大隊本部の炊事係の勤務を指示された。ラッパ手になって大事にしてもらい本当に良かったと思う。

炊事係は道路建設作業とはくらべものにならない程楽な仕事で、うまいものが腹一杯食べられこれでは太平楽だ。

早速、松木さんと大隊本部の炊事係の幕舎に引っ越しをした。炊事係は全部で二〇名で、各中隊の寄り合い世帯のようなもので、先輩や後輩といったうるさいこともなく皆仲良く楽しく働いていた。親しい友達も三人できて、毎日が充実した生活だった。

炊事の班長は下士官候補出の浮穴俊夫軍曹で、人格者でもあり皆からも尊敬されていた。休日には酒が支給され、私達と一緒に幕舎の中で宴会となった。浮穴班長はほとんど酒は飲まず、自分に支給になった酒は全部私達に回してくれた。

いよいよ宴もたけなわになった頃、私がかくし芸の秋田音頭を身振り手振りよろしくやったら、皆が腹を抱えて大笑いし、それ以来私に目をかけてくれるようになり、連隊に帰ってからも、どこで会っても「ヨー」と声をかけてくれた。

この残飯捨て場に、夜な夜な熊の親子が出没し始めた。私と炊事で友達になった機関銃中隊の青木が、夜遅く野外の風呂に入っていたら、脱衣所で人の気配がしたので、

「風呂はもうお終いだよ」

と言ったところ、垂れ下がっていたむしろがさっと開いて、なんと大熊が二本足で立ち上がりこちらに向かって来そうな様子だ。彼は風呂から転げ落ちるようにして飛び出し、

「熊だぁ！　熊だぁ！」

と叫びながら、真っ青な顔をして幕舎の中に飛び込んで来た。

熊のヤツもだんだん図々しくなってきて、もしこのままで、兵隊に危害を与えるようになっては大変と、小林大隊長は連隊長にこのことを報告し、熊退治に発砲してもよいとの許可をとった。

早速、残飯捨て場の傍の松の樹の上に櫓を組み、軽機関銃を据えつけて夜になるのを待った。その夜の一一時頃、

「ダ、ダ、ダ、ダ、ダッ」

と、軽機の発射音がした。

「やったナ」

と思い、すぐに残飯捨て場へ恐る恐る近づいて見たら、残飯捨て場の穴の中に二頭見えたがすでに死んでいた。親子熊らしい。

皆で引き上げ、傍の白樺の立ち木に横棒を渡し、熊が立ち上がった形で前足をしばり、こうして親子熊の展示となった。

（続く）

短歌

古平町岬短歌会

軒したに孵りし雀嬉しげに鳴きて次つぎ飛びたちゆきぬ
池田　テル

雲雀上がる畑の中の細道を友四五人つれ立ち通ひき
奥山　きよみ

珍らしきアスパラ菜の種友にも分け大切に蒔き雨を待つなり
鈴木　時子

ベッドにさす午後四時の陽の暑ければハンカチ掲げて日除けとなしぬ
竹内　コト

故郷の三日月池に咲く睡蓮君と語りし思いでの池
田中　香苗

五月晴れ車窓より見る連山に白き蝦夷富士くっきりとあり
丹後　初江

せきれいの朝より走る牧場は日増しに緑みなぎりてきぬ
東　美知

対岸の闇にひとつの街灯の光流れて海静かなり
堀　典子

知床の山は朝霧深くして悲願の四島（しま）は霧に見えざり
寺内　りよう

俳句

古平俳句会

夏潮を見下ろす岬の露天湯に　斉藤波留

引潮の春の礁にぬめりかな　山口悦子

海鳥の羽根岩に干す夏の海　越野敏雄

尖りたる言葉流して春の海　大和田絵伊

女郎子岩夏めく海となりにけり　福井幸平

裸木の芽吹きに春を感じをり　高橋重子

一望の夏穏やかに日本海　仲谷比呂古

大胆に派手めの帽子更衣　室谷弘子

校庭の子等にほほえむ八重桜　泉清三

簾越し竹売りの声余韻あり　外山俊久

故郷を持たぬ浮雲余花と合ふ　渡辺嘉之

自ずから燃えて鮮やか罌粟の花　堀典子

小女子漁酣の灯のほのとあり　越野清治

古平町史年表

▲ 納税奨励のための浪花節が小学校で開かれ大勢の聴衆が集まる

▲ 余市からリンゴ積み取りに来ていた川崎船が本陣の浜の沖で遭難し、3人が溺死する

昭和8年（1933）

▲ 古平信用組合が、漁船10隻の建造計画を盛り込んだ拡充五か年計画を立てる

▲ 古平連合青年団が琴平神社で建国祭を行う

▲ 古平・岩内間の道路建設のため、支庁職員・町吏員・議会議員らが、岩内までの踏査をする

▲ 札幌土木事務所職員を加え、再び岩内までの踏査をする

▲ マンガンの需要が増え、稲倉石鉱山からかます入りの鉱石が馬車で運ばれ、㋕の浜から艀で汽船に運んでいる

▲ 北海道水産物検査所古平派出所が浜町に設置される

▲ 真夜中に鴨居木で馬小屋から出火し全焼、馬2頭が焼死する

▲ 余市町黒川町で火事があり180戸余りを焼失したが、古平からも火の手が見えた

▲ 火災予防デーに消防組員や火防組合員が出てビラを配布し、自動車も出て啓蒙活動に当たる

▲ 古平小学校では、児童の健康保持のため肝油を与える

▲ 佐上信一北海道庁長官一行が、余別から水試調査船探海丸で来町する。渓山荘(㋑公園別荘)で休憩し、視察の後、再び船便で余市に向かう

▲ 札幌神社祭に㋑公園(偕楽園)で鎮守祭が行われ、大勢の人が集まる

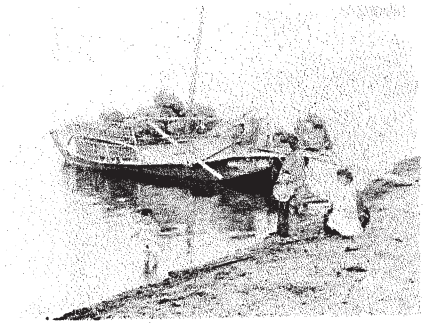
▲ 古盛座で逓信省保険局主催の映画会が開かれる

▲ 浜町・やぶ長食堂が、古平で初めてのカフェーを開業する

▲ 古平・美国両町青年団の陸上競技大会が美国町で開かれ、古平連合青年団が優勝する

▲ 古平尋常高等小学校高等科生徒100余人が、函館方面へ修学旅行に出発する

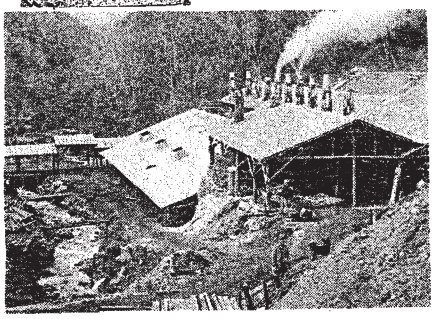
▲ 動物サーカス団が種田干場で興業し大勢の見物客で賑わう

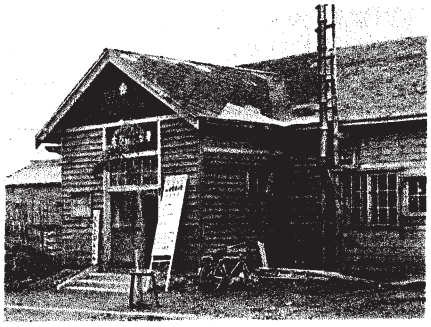


⬆本陣の浜の通称・合いの子船

昭和四年、鉄興社が稲倉石鉱山を買収し、本格的な操業を始める。昭和八年頃の焙焼炉（ばいしょうろ"マンガン鉱を焼く炉）⬇

⬅ 久原鉱業当時の鉱石運搬台帳





⬆水産物検査所の建物が警察署、跡地に現在の駐在所を新築